

だった。人のことなど振向く余裕もなく、がむしやりに自分の生活を守って来た。そんな訳で先生と私との間には何のか、わりもないかの如くであった。そんなある日、先生は田中氏を通じて岩波国語読本の教授参考書を借りたいと言って来られた。幸い持合せて居た二三冊をお借しした事だった。何でも新しい教科書を編纂されるとか云う話であった。それきり忘れともなく忘れて一年ほど経ったある日、突然先生の来訪を受けた。自身で参考書を返しに見えたのである。先生の几帳面さに今さらながら感激し恐縮した次第である。教科書の方は或る事情で逐々出さ仕舞だつたとか聞いた。

先生が学界で華かに活躍して居られるのを仄聞しながら十年一日の如く中学・高等学校で教鞭を執っている間に二十五年が経ってしまった。さしにも新陳代謝の劇しい高・中で久しく第一線に居た自分にも天人の五衰？が訪れる日が来た。同僚九人と共に配転されて大学の図書館に勤務する身となった。劇しいコンプレックスや自己の憐悪と闘いながら色とりどりの若人達の中に交って働きつつ、老醜の次第に露わな自分を省みる時、私の氣

持は悲劇的であった。絶望的でさえあった。ある老先生は路上で出会った時、虚心に大学に来た事を報告し御挨拶しようとした私を避けるようにさせられた。逃げるようにバスに乗って行かれる先生の表情には明かに狼狽と固い拒非の氣持が読みとれた。私は落目になつた者へ接近する事によって自己の保身に危険を感じての行為と老教授の行いを憶測しひがむ前に自分自身の中に内抱する弱点（それは極度のコンプレックスと自虐の果てに人を近づけさせない一種の妖気の如きものとなつて私の身边にまつわりついて離れないもの）に氣付いて慄然とした。

そんな暗い思い出の日からでも早五年経つ。私は私のストラップを脱け出すために私なりの努力をした。友人や先輩の二三の方々からも温い援助を得てやうと立ち直りかけた或日のこと、勤務を終えて帰りがけ、同僚を待つて校庭のベンチに腰を下している自分につかつかと近寄つて来られたのが清水先生であつた。

「近頃はどうですか。あちらに居た時と氣分はちがいますか。」と云つた意味の一言二言であつたがそれがその時の私にとってじゝなで食べるには。」とおっしゃる。ぼくは見当違いにドギマギして尋ねた。

サンボウカン
大上 敬義

「きみ。サンボウカンを買ってきてくれませんか。」

法文学部に創設の法文学科国文学科に入つてもなく、主任の清水先生からこう言われたの突差に、（大学教授が学生にサンボウカンを買いにやらせてどうするのだろう。研究室でも食べるツモリかな。それにしてもチョット変わつてゐるな。）と思つた。直感的には「カン」のひびきで食べ物ということはピンときたが、それがヨウカンの類かミカンの類か。第一、サンボウカンをぼくは知らない。

「サンボウカン？ てなんですか。」と聞くと先生は困つた風に、それでもにこややかに手まねをつけて。

「ほら、夏ミカンの一種で、甘いがあるでしょう。あれですよ。あれを五つ六つ。」と財布をお出しになる。

「そんなに沢山？」と、ぼくがオカネに驚くと先生は少し照れて、「少ないかな。みんな

んと胸に迫る力を持つて居た。私はその時先生の温い氣持は充分汲みとれてはいながら「住めば都ですわ」等と強がりめいた言葉をつぶやいて御別れした事を今さらながら申し訳なく思っている。

今年の四月であつたか、五月であつたか、先生が突然図書館に見えた。先生が定年になられた事の御挨拶に見えられたようなのでしばらく話して居る中にふと鞆の中に持合せていたのを思い出して、私の貧しいライフワーク「歌集いしづみ」を遅ればせながら差上げた次第であつた。

先生につながる思い出は三十年間の学園の消長と関聯して未だ未だ尽きない。先生に教えられる所は多々あるが、然し私は私の道を歩くしか仕方がない。寂しくても、心細くても、ゴーイング・マイ・ウェイである。恐らく先生も同じ思いで居られることだろうと思ふのである。

ぼくは小説家になりたいといつたら早速、

「学校だけはサボらないようにしなさいよ。」と先生が凶星をされた。ぼくはいつべんに舌がもつれ胸が詰まって座り込んでしまった。本当はサボル魂胆だったのが、先生のひとことで、（これはエライこつちや。）と思ひかけるようになり、思わず「ハイ」と子供みたいな返事をしてから、（サア大変と）先生を見ると例の半泣きみたいなやさしい顔でぼくを見つめられる。ぼくは急に自信を失なつて登校しないと不安でしかたがなくなり、毎日、それも早い目に家を出ては大学の周辺を歩き廻つた。サボロウとする氣持がわくと先生のひとことがこの時の突顔と共に浮かびあがってくるのである。妙なことになつたものだが、おかげで食うや食わずの三文文士にはなり損ねた代りに、学校勤めをしていられるのにもこの時の耳学問が大いに役立つ結果となつた。

卒業前から中学に奉職する際にも先生の御紹介にあずかった、不肖のぼくは一向御無沙汰失礼ばかりしてきてしまつた。役員後、小泉先生のお口添えて当時の初音書房から処女